

天気予報で西高東低の話がでるようになり、今年もカシミアの季節が巡ってききましたね。

おかげさまで夏の間のカシミア受注会では昨年一シーズンの売り上げ分の注文をいただくことができました。納品に向けて嬉しい悲鳴で生産にはげんでいます。ノリスクのUTOフェアが威力を発揮することを理解していただいたようです。

営業で頑張っている上坂がアメフトの一部リーグの試合に出場。応援に西武ドームと横浜スタジアムへ行ってきました。お店を訪れる厳つい男に驚かれる方もあると思いますが、中身は芸術系でケツコウ繊細な奴なんですよ。

十一月からは現物展を中心としたカシミアフェアを提案します。すぐ持って帰れる分現物的です。一点もの、現品限りもこのフェアに出品します。

【自分の店のデザイン】

『展示会に行ってもなかなかお店が求めているセーターがない』という悩みの言葉をよく耳にします。お客様の好みは自分たちが一番知っているということで『希望のサイズと色で作ります』を活用して自分の店ならではのサンプルで展開しているお店があります。『タートルの襟を2センチ高めに、ウエストを絞ったオリジナルで6色・3サイズ』といった具合。注文生産で大好評。こんな賢いコラボレーションは大歓迎です。

【限定商品とは】

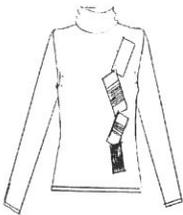
- ①同じ色の糸が終了し、新たにサイズなどのオーダーを受けられなくなってしまう貴重な色の商品。
- ②少量しか糸を手配できなかった貴重な色。
- ③採算に合わなくて少量しか作れなかった。
- ④手がかりすぎてサイズ展開やオーダーを諦めた品番。などが一点ものです。

【お店にあったカシミアフェアを】

ある日お店の方とお話していて驚いたことがあります。フェアというお客様にお土産などをご用意して、など大変なプレッシャー

多彩なアップリケ

No. 1301 ¥49,000.-



5色+ラメ糸を使った、上品でカラフルなアップリケ。ちょっとおめかししたお出かけにぴったり。セレブなマドモアゼルを素敵に演出します。

配色カーデ

No. 1252 ¥45,000.-



クルーネック・プルオーバーのネック部分を可愛いリボンにして知的な可愛さを表現しました。貴方の好きな配色で自分だけの一品を作ってみませんか。

ドルマン

No. 1234 ¥48,000.-



受注会のサンプルを、どうしても今ほしいと買われてしまう。前ポート、後ろVの女っぽい襟開きとたつぷりの袖が一枚の魅力のドルマンのスリーブ。自宅でくつろぎながらが最高に贅沢気分。



芙蓉

だったそうです。そんなお店もあるでしょうが大半は葉書50枚〜100枚をお得意さんに出してご案内の声をかける極普通の取り組みです。一度経験すると2度目からはずっと気楽で和やかな雰囲気の結果もいろいろです。

【南青山界限】

ファッションの街の能舞台

青山 鏡仙会 能楽研究所

表参道の交差点からみゆき通りを下っていくと最初の信号のある交差点の角に三角のビルミッドのようなガラス張りのプラダのビルができました。

今回はそのプラダの斜め前にある一見目立たない建物です。普段通っている人もすぐには思い出せないんじゃないかと思いますが、ここは鏡仙会 能楽研究所という能の劇場なんです。ファッションの街青山と純日本の伝統芸能の面白い取り合わせです。

私も週に何回かは前を通るんですが能などという高尚な伝統芸能にはトンと縁がありませんから中には入ったことはありませんでした。

コンクリート打ちっぱなしのシックな建物の入り口に『社団法人・鏡仙会能楽研究所』の小さな表札がかかっているし、建物の横に『茶屋入り口』の表示もあるんでホールは知っていました。その能楽堂に思わぬきつかけで入る機会ができました。

20代前半の頃からよく知っていて、僕がハッチヤンと呼んでいる女性がきつかけです。当時、『いまだとき若い娘が三味線なんて古くせえ』なんて憎まれ口を言っていて、ひとつ年上のハッチヤンによく怒られていました。そのハッチヤンは今では西松布吟というその世界ではCDも出し、多くの海外公演もこなした活躍している女性なんです。

時々会社に来てくれてセーターを買ってくれるんですが、話をしていると二十代の昔に戻って、『ハッチヤンの三味線のCD聴いても何言ってるのかちっとも解らないよ』とか『男と女が惚れたはれたのチントンシヤンは俺の趣味じゃないよ』なんて悪態つので、『アンタ！日本人でしょ！もっと日本の文化を勉強しなさい！』と怒られてばかりです。

そんなハッチヤンからUTOの近くの青山の鏡仙会で『地唄と舞』をやるからと誘われ、西松布吟先生に变身したハッチヤンの公演に行くことになった次第です。

解らないなりに居眠りもしないで最後まで拝聴しました。公演内容の評価などというのはド素人の私が出る幕ではありませんが、はじめて入った鏡仙会能楽研究所は興味深く、いい経験になりました。

印象的だったのが、靴を脱いで上がること。コンクリートの打ちっぱなしと白木の内装、屋根つきの能舞は幽玄でいい感じ。

客席は階段状の畳敷き。観客は腰掛けたり畳に座布団で座ったり。背もたれがないので結構辛い。若い人も結構いる、ということも年配者がいっぱい。

男性トイレの便器がアメリカの空港にあるようなてっかい西洋人使用の超特大。こんなことで感心しているということは日本を知らな過ぎ、日本の伝統文化に対する知識の無さに反省しきりでした。



ニットの話 (十)

カシミアと匠の技とのベストコラボレーション

匠夫妻の天使のカシミア

『天使のセーター、天使のストール』は、手に取ったほとんどの人が『やわらかい』『気持ちいい!』といってくれる我がUTO自慢のシリーズです。カシミアならではの、いや、カシミアでもここまでの風合いの商品はそんなにあるものじゃないと自負しています。品番の1100番代がこの天使シリーズです。

この天使、初めてトライしたのが7年前。カシミアをライフワークにしようというときにハウスオブホワイトカシミアというブランドを立ち上げたときカシミアでしかできないものを、ということでも何回も試作して作り上げたもの。これを作っていたのが内田昭三さん。

内田さんは私が今まで20年以上ニットに携わってきた中で出会った最も優れた技術者の一人でニットの匠と尊敬している人です。今の日本ではほとんど編む人がいなくなってしまう細かい編地の12ゲージ、10ゲージのセーターを高い技術で丁寧に作ってくれるUTOの宝です。

天使シリーズは細い糸を太い針に掛けて編むんですからかなり邪道で、編むほうは大変なんです。そんな無謀なお願いをしてしまうのがUTOのずうずうしさ。またそんな邪道のお願いをきちんと商品にしてくれるのが内田さんの凄いとこです。

この天使、引っ張りがちよつと強いとすぐに糸が切れてしまいます。又、手機械は編むときに適度の錘をつけて引っ張りながら編むんですが、編地が繊細なためにほとんど錘をつけれないんです。

そのために細心の注意を払いながら編みだてます。それも一定の強さで編むストールなどはまだいいんですが、セーターは編みながら成形するので、増し目や減らし目のとき細くて繊細な糸を慎重に、しかもリズムよく大胆に引っ張りながら編み目を移していくんです。だから熟練の技が必要なんです。

強度のある化学繊維や綿、引っ張りに強い梳毛などの糸なら自動機でも編めるし、複雑な編地でもこんなに苦勞しないでしょう。

その内田さんの確かな技術をサポートする奥さんが丁寧で、お二人は名コンビなんです。

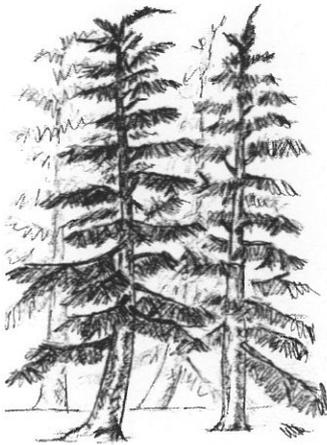
一枚一枚のセーターを超特大の拡大鏡で厳しくチェックし、上がった商品は必ず両手で捧げ持って慈しみがら仕事をしておられるのを目の辺りにしたら、セーターへの愛情とこだわりをお客様まで伝えるのが我々の使命だと思っております。

効率よく大量に次々と製造されるのと違い、UTOのセーターは長年の経験と技術で『貴方の為に作ったセーター』です。内田さんとのやりとりは品番だけではなくいつも『何々店の誰々さんの袖のことだけだ』と一人一人の固有な名前です。

愛らしくふわふわと天を舞う天使をイメージするこのセーターやマフラーは、こんな具合に熟練の内田さん夫妻に作ってもらっています。

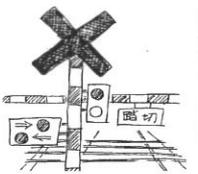
男女兼用のこの天使のマフラーを私ももうシーズンも首に巻いています。かなりくたびれてきましたが首に当たると柔らかさがたまりません。昨年買ったいただいたお客様から色違いを注文いただきました。『着てないみたいくらい軽く気持ちいいよ』と実際に着ていただいて良さを認めてくださった方からのリピートに嬉しさ倍増です。

こんな繊細な商品ですからどうかやさしく取り扱い扱ってあげてください。



忙中暇話・ニット屋のたわごと

開かずの踏み切り



毎日の通勤で利用する駅は中央線・武蔵小金井駅です。この駅は両側を道路が走り、東側は小金井街道という大きな通りで、今の踏切が大きな問題になっています。

その間を特急『あつぎ』や『かいじ』が通過してほぼ二分に一本。下りも同ぐらいの本数、ということは一分間に一本の列車が通ることになります。すごい過密ダイヤですね。そのために、遮断機が開くのが六十分になんと約六十秒遮断機が上がると長時間待たされた人、自転車、車が両方から殺到します。ペーカも足の不自由な老人もいます。しかも半分も渡らないうちに警報機が鳴り遮断機が降り始めるのでみんな右往左往、まるで『通せんぼ』の遊びみたいな様相です。これがゲームでなく本物の列車が来るんですからマジにやばいです。これが毎日のことですから。

この状況を打開すべく九月末から高架工事が開始。長い予告期間にはニュースの報道でもあったとおりにおかげで、カミさんは国立のお店に行くのにバスで府中経由という旅行みたいな経路でした。いざ工事が始まり、各踏切には警備員を配置しても長くならぬ踏み切りは毎日のようにトラブルが続きます。

通勤電車の中から踏切の様子を見ながら、ビジネススクールの設想的に『もしJRの社長だったら、高架工事完成までの五年間どうしますか?』と度々考えます。『責任はJRが行政が専門的なことは判りませんが、仮にJRに責任があるとしたら』安全を願いながら現状維持という答えではX。経営者失格だと思えます。

生活圏ですら度々あの踏切を体験していますが、今のままにして警備員の誘導ぐらいで誤魔化せる状況ではないことは明白です。死亡事故などが起きた時の保障や業務の混乱、信頼失墜などを考えると一刻も早く積極的に安全第一の設備にしたほうが得策だと思えます。

現在は一つの踏み切りに二人から四人の警備員。仮に人員費を三分、時給千円で十八時間で計算した場合、一日ざつと五万四千円。五年で約一億。

私の答えはずっと前から、『工事開始までに自転車も乗れる大型エレベーター付き横断陸橋設置』ですが、多分一億からないでしょう。超えたとしてもJRの経営の根底を左右する金額じゃないと思えます。

素人が計算しても出る結論ですが、やらないのは行政と法的な問題でもありますが、もしそんな責任の擦り合いなままに住民不在。事故が起きてからは取り返しがつかないと思っております。でも、こんな踏み切りは他にもたくさんあるんですよ。

元、旅行屋のお勧め(十) フランス・パリ

オテル・リッツ

パリのヴァンドーム広場といえば、フランスというより世界でもっとも高級な広場でしょう。宝石のブティック、カルチエ、香水のアーベル、美術館を思わせる画廊の数々。かの有名な、と言うのが頭につく店ばかりです。

そのヴァンドーム広場の一角、可愛い丸いテントのある建物がかの有名なオテル・リッツです。

一九七五年、念願のついに泊まれたオテル・リッツ。『なぜリッツがこんなに評価されるんだろう』と思っていたんですが泊まってみて理解してきたような気がします。豪華さで言ったら、パリの中でもモジュール・サンクやパリ・インターコンチネンタル、クリヨンのほうがずっと豪華でしょう。これらのホテルは一步足を踏み入れると『凄い』と感嘆の声を上げるほどですが、リッツは豪華ではあっても脅かしや威圧するような感じは全くありません。高貴に優しく包み込んでくれる優しさです。

セー又河左岸のサンジェルマンからタクシードリッツ・ホテルに帰ったときのことです。『オテル・リッツ シルヴブレ』とカッコつけて言ってみましたが、運転手さんは一瞬無反応なんです。発音が悪くて通じないのかなと思っっている、とびくりにした表情で『ヴァンドーム』と聞き返して来るんです。『ウイ、ウイ』と答えると、なんとなく訝し気に走り出します。こつちも『あんな有名なホテル知らないのかな』と不安げでした。何回もバックミラーで見ているのが感じられませんでした。

ホテルに着いて料金を支払っているときに運転手がボロッと言った言葉で疑問が解けました。『二人、お客さんを運んだのは始めて。その後、僕がホテルの中に入って行くまで車の中から見ていました。』『こんな若造が、このオテル・リッツに泊まるような客じゃない』と運転手さんは見抜いてたんですね。

泊まり客が玄関に帰ってくると、名前を覚えて『こんにちは』と叫ぶ。『ウー』と言いがらキーを渡してくれませう。次々と変わる宿泊者の名前と顔を覚えるのは大変と思えますが、やはりプロなんです。それに、泊まったのは冬でしたが、渡された真鍮のキーが程よく暖かっているという肌理の細やかさです。

豪華ホテルにありがちな、なれないお客を見下すようなそぶりや微塵もなく、卑屈でもない自然な立ち振る舞いはとっても気持ちのいいものです。こんなところも一部の人だけでなく広く人気があること理由の一端ではないでしょうか。

